

観察, 計測を行い, その位置的関係を明らかにした。

(資料) 資料は本学生体構造学講座所有の乾燥頭蓋で, 歯年齢ⅡA期13顆, ⅡC・ⅢA期13顆の計26顆を用いた。

(方法) 本学附属病院放射線科のX線CT撮影装置「Asteion」にて乾燥頭蓋を撮影し, 得られた画像データをもとに, 基準平面の設定を行った。画像データからの水平断面画像および垂直断面画像を用いて, 第二乳臼歯および第二小臼歯(本研究では骨小囊を観察)の位置について, 距離や角度の計測を行った。

(結果) 1) 水平断面画像からの, 第二乳臼歯歯冠に対する第二小臼歯(骨小囊)外形の重ね合わせや中心位置の比較から, 上顎では骨小囊が口蓋側寄りに位置していた。下顎ではやや遠心側寄りに位置していた。2) 垂直断面画像からの, 第二乳臼歯歯冠軸および骨小囊の位置の基準平面との角度から, 骨小囊の位置は上顎の方が下顎よりも乳歯歯冠軸との差が少なく, 口蓋側方向に位置していた。

(考察) 顎骨内での永久歯発育状態(位置)が上下顎で異なっていた。これは乳臼歯の歯根形態, 後継永久歯の大きさ, 顎骨の形状の相違等とも関係しているものと推測される。また顎骨内の永久歯は, その後, 歯根形成・萌出に伴って上下顎の調和を持つように咬合していくものと推測された。

(結論) 第二乳臼歯歯冠に対する第二小臼歯<骨小囊>の顎骨内での位置は, 上下顎で異なった様相を呈していたことから, 乳臼歯の治療を行うにあたっては, こうした特徴を念頭において処置を行う必要性が示唆された。

8) 静脈内鎮静下でのプロポフォールによる圧受容体反射感受性の変化

○藤岡 一途

(奥羽大・歯・口腔機能分子生物)

(目的) プロポフォールは全身麻酔のみならず静脈内鎮静法にも用いられて久しいが, 圧受容体反射感受性に与える影響についての見解はさまざまであり, 一貫性を有していない。そこで, 心

拍変動・血圧変動スペクトル解析を用いて, 静脈内鎮静下でのプロポフォールが, 圧受容体反射感受性に与える影響をミダゾラムと比較し検討した。

(方法) 対象は, インプラント埋入術が施行される20名の健康成人とした。このうち10名はプロポフォール(以下P群), 残り10名はミダゾラム(以下M群)で静脈内鎮静法を施行した。コントロールとして静脈確保前に安静仰臥位にて心拍・血圧変動を測定した。静脈確保の後, 各種モニターを装着してから薬剤を投与し至適鎮静度を保っているのを確認してから再度心拍・血圧変動を測定した。心拍変動は心電図により得られたR・R間隔を, 血圧変動はトノメトリー法により得られた収縮期血圧をそれぞれスペクトル解析した。圧受容体反射感受性は心拍変動のLF成分(0.04~0.15Hz)を血圧変動のLF成分(0.04~0.15Hz)で除し, 平方根して求めた。同時に両薬剤での心拍変動における“べき”スペクトルの傾きを測定した。

(結果) コントロールと比較してP群の圧受容体反射感受性は有意差を認めなかったが, M群ではコントロールやP群と比較して圧受容体反射感受性が有意に低下した。また“べき”スペクトルの傾きはP群では $1/f$ のゆらぎであったが, M群では傾きが緩徐であった。

(考察および結論) 今回は大きな循環変動は認めなかったものの, Cullenらが報告したように, プロポフォールによる血圧低下により心拍数が増加しないのは, 圧受容体反射のリセットが生じた結果と考えられる。またP群の“べき”スペクトルの傾きが $1/f$ であったことから, 静脈内鎮静下でのプロポフォールは脳の階層性を保つことが示唆された。さらに本研究の結果より静脈内鎮静下でのプロポフォールは圧受容体反射感受性を低下させないことが示唆された。

9) 卵巣摘出ラットの骨密度に対するstatin長期投与に関する研究

○寺島 信一

(奥羽大・大学院・歯科保存)

(目的) statinは, コレステロール合成の阻害剤であり, 高コレステロール血症治療薬として